

## まとめ

今回は土器の成立過程を、各要素の採用の前後関係で確認した。その結果、典型的な堀之内2式土器は、関東西部と関東北部が相互に影響しながら成立したものであると判断した。しかし、本稿における資料の把握は十分でなく、より理解するためには、さらに細かい文様要素の構成を比較していく必要性があるだろう。

## エジプト先王朝時代における生活様式について

山崎 美奈子

### はじめに

先王朝時代は国家形成過程として古代エジプトの中で位置づけられる。この過程で土器はほぼ同じような形になり、生活雑器は地域性が消失して規格化すると言われている。土器の規格化は、特定の器形を指向したことが想定されるが、規格化について明確なデータを示した研究はほとんどされていない。そこで、生活の一端に迫るために定量的分析を通じて先王朝時代の土器の規格化について客観的な検討を加えたい。

### 二、分析の資料と方法

分析資料は、先王朝時代から初期王朝時代（ナカダⅠ期～Ⅲ期）にかけての八遺跡（タルカン、ヘルワン、アビュドス、バダリ、マトマール、ナカダ、エルカブ、エレファンティネ）において完形あるいは略完形で報告されている墓域出土の土器資料（六六四七点）である。

土器の時期設定は、ヘンドリックスによる編年案に従い、ヘルワン遺跡とエレファンティネ遺跡は各報告書に準じた。分析にあたっては、ナカダ期Ⅰ期、ⅡA～B期、ⅡC～D期、ⅢA～B期、ⅢC

—D期の五期に時期区分した。

分析にあたつて、対象土器資料を形式により四つの器種（皿形、碗形、ビーカー形、壺形）に大別し、さらに各器種の中で器壁の屈曲具合など胴部の形を第一基準とし、さらに底部が平底か丸底（尖底を含む）であるかにという器形の特徴にあわせて細分した。結果、五〇タイプに分類された。

分析方法は①全遺跡の各器種の出土割合とタイプ数を時期間で分析し、②対象遺跡を便宜上北部（タルカン遺跡、ヘル WAN 遺跡）、中部（マトマール遺跡、アビュドス遺跡、バダリ遺跡）、南部（ナカダ遺跡、エルカブ遺跡、エレファンティネ遺跡）の三地域にグループ別けして、この三地域間で三〇タイプある壺形のアセンブリッジを比較する。

### 三、分析結果

①エジプト全土を対象とした各時期における各器種の出土割合は、皿形や碗形の割合はほとんど変化しないのに對し、壺形の割合はII C—I D期に増加した後横這いの傾向があり、ビーカー形の割合は減少する傾向にある。

各時期におけるタイプ数の比較では壺形のタイプ数がナカダI期からII C—I D期にかけて大きく増加し、その後横這いの傾向が認められる。

②各地域の壺のアセンブリッジについて地域間に大きな違いは認められないものの、タイプ数は、中部と南部においてはナカダI期

から増加し、ナカダII C—I D期以降減少するが、北部においてはナカダIII期を通してわずかに増える。タイプ数の減少は、一部の類似した器形同士がまとまっていくことによる変化であることがわかつた。北部ではタイプ数が減少しないことから、全遺跡を通して認められたタイプ数の横這い傾向は北部のタイプ数によるものとわかった。

各地域におけるタイプの出土割合は、ナカダIII C—I D期において、北部・中部・南部で北部では壺形のタイプ4—7と4—9が二〇%～三〇%，中部ではタイプ4—24が三三%，南部ではタイプ4—18が三六%と各地域内の他のタイプと比較して高い出土割合を占め、地域間で高い割合を示すタイプが異なる。

### 四、考察

中部と南部におけるナカダII C—I D期以降の一部の類似した器形同士のまどまりは、土器が規格化することを數値で追認するものとなつた。ナカダIII C—I D期における地域間でのタイプによる出土割合の違いは、それまで大きな違いが見られなかつたことから、王朝成立という社会的構造の変化が関係していると考えられる。北部では中部・南部に比べて多くのタイプを保持し続けることをあわせて考えても、國家形成期の中で地域統合が進み地域性が消失すると唱えられてきたのに対し、土器の形においてはむしろ王朝時代に地域

色を示し始めると言える。このことは、各地域における生活の様式がそのまま引き継がれたり、国家統一にともなって急激に変化するのではなく、社会構造の変化に各地域が適応しながら変化することを示している可能性がある。

おわりに

先王朝時代における土器の規格化について定量的分析を行った結果、土器の規格化を支持する結果となつた。一方で初期王朝時代には、従来の説とは異なり地域色が認められた。今後は器形以外の属性を用いて多方面から先王朝時代における土器と生活の関係について考える必要がある。

古代エジプト、テーベ・ネクロポリスにおける  
岩窟墓の造営地選定について

—第十八王朝アマルナ期以前の考察—

福田 莉紗

はじめに

テーベ・ネクロポリスには、古王国時代からグレコ・ローマン時代まで、三千年近い間に、東西三キロメートル圏内という狭い範囲に千基にものぼると考えられる岩窟墓が造営された。このような長

期間にわたつて膨大な墓が密集する墓域は、古代エジプトの中でも最大級である。

本研究は、如何にして岩窟墓の造営地が選定され、ネクロポリスが形成・発展したのかを明らかにするものである。まずは、政治と宗教の中心拠点としてテーベが繁栄した新王国時代第十八王朝のアマルナ期以前に年代付けられる岩窟墓の造営地選定の要素について研究した。尚、本研究において使用する「岩窟墓」とは英語で“Private Tombs”と称される高官や神官等の墓で、テーベ・ネクロポリスにおいては王家の谷と王妃の谷以外に造営された岩窟墓を指す。

#### 【①岩窟墓の造営地選定の要因】

##### 一、先行研究と問題点

従来の研究では、王墓地や葬祭殿との立地関係等、王の建築活動との関係性や、同じ社会的階層で墓群を形成していることが指摘されている。この他にも様々な要素が複雑に絡み合つているとされている。垂直分布も一つの要素であると示唆されているが、これを主軸に置いた研究はまだない。

既往研究では、現代の地名を使用した地域単位、或いは各墓群とといった大きな枠組みでしか言及できていない。

##### 二、本研究の意義と目的

テーベ・ネクロポリスの形成過程をより精緻に復原するためには、個々の岩窟墓を対象に研究する必要がある。岩窟墓の造営地選定の